

1 学校教育目標 校訓「清明・自律・創造」のもとに、高い志と進んで責任を遂行する強い意志を持ち、社会に貢献できる、知・徳・体の調和のとれた、心身ともに健全な人材を育成する。	2 本年度の重点目標 ①生徒一人一人の学習状況等に応じた『伸ばす教育・伸びる教育の推進』 ②生徒一人一人の関心・意欲に応じた『進路ガイダンスの充実』 ③ハイレベルな文武両道を目指す『質の高い授業』と『行事・部活動のバランス』 ④規範意識や礼節、報恩感謝などの素養を育むことによる『品格のある校風の醸成』 ⑤家庭や地域社会との相互理解による『信頼される学校づくり』 ⑥校舎制による円滑な学校運営
--	---

達成度
 A:十分に達成できた
 B:概ね達成できた
 C:やや不十分である
 D:不十分である

重点目標を具体的に評価するための項目や指標を盛り込む

3 目標・評価		①生徒一人一人の学習状況等に応じた『伸ばす教育・伸びる教育の推進』		達成度	成果と課題 (左記の理由)	具体的な改善策・向上策	担当分掌 (部)	ポイント	
領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策					
教育活動	●学力向上	生徒の学力の向上を図ることができたか	①1週間の家庭学習時間の平均を、1、2年生は15時間以上、3年生は20時間以上にする。 ②各学期末成績で欠点保持者を1割未満にする。 ③考査前、考査期間中の家庭(学校でも)学習の状況については、学年主任や担任に取り組み状況を確認し、期末考査後には取り組み結果を全校集会時に伝える。 ④進研模試の学習到達ゾーンで、B2以上を増やす(1年1月40人、2年1月30人、3年11月25人)。また、D層を減らす。	①各教科で具体的に家庭で取り組むべき内容を指示し、提出指導の徹底を図る。また、機会あるごとに家庭学習習慣を呼びかける。3年生においては、白高祭(学校祭)からの気持ちの切り替え指導に重点をおく。 ②普段の課題の未提出者には、必ず個別の指導をする。考査前には成績不振者に指導を行う。また、学期ごとに成績状況をこまめにチェックし指導を行う。 ③全校集会時に、定期考査での取り組み状況についても生徒に伝え、意識向上を図る。 ④模試後には成績状況を提供し、各教科で生徒の学力を把握することで、適切な教科指導を行う。	C	①1週間の家庭学習の目標達成度は、1年生:12.7%、2年生:29.5%、3年生:33.9%と学年が上がることにより目標到達率は上昇している。しかし、毎日2時間以上の学習ができていないのが現状である。課題はほぼ提出できるが、それ以上の自発的学習につながっていない点が課題であると感じる。 ②欠点保持者について、1学期末1年生7名・2年生21名、2学期末1年生16名・2年生27名で1割以下を達成できておらず、ほぼ同一人物が同一教科で欠点となっている現状が課題である。 ③1年生はclassi・2年生は今未来手帳を活用し、担任による学習状況の把握を行ったことにより、上位層の意識、成績共に向上が見られた。下位層の意識と学習への取り組みの強化が課題である。 ④進研模試の学習到達ゾーン目標達成度 1年生:55%(22人)2年生:80%(24人)3年生:48%(12人)と数値的には目標を達成できなかった。定期考査では十分な結果を出す生徒でも模擬試験となると平常の授業レベルとの差が大きすぎてB2レベルまで到達できていないのが現状である。だからと言って授業レベルを模試レベルまで上げるとついでこれない生徒が増えるという点が大きな課題である。	①課題量を増やして学習量を確保しようとする試みは、本末転倒のように思える。なりたい職業、行きたい大学から逆算した数値目標(例:英検2級合格や全国偏差値60、県順位1000番以内等)を各自が設定し、そのために各々に必要なことを肅々と実行する。それを授業者や担任が定期的に確認して軌道修正していくようなサイクルを全体として管理していくシステムを構築していくのも一つの手である。 ②学年全体での下位生徒への学力向上に向けた取り組みの強化及び、欠点保持生徒へ各教科から次回考査に向けた取り組み強化の指導を行う。 ③考査前学習会の欠点保持者が多数の教科を中心とした、取り組みの改善を行う。 ④家庭学習と授業をよりリンクさせ、授業内容の理解度や浸透度を高める方法を模索する必要がある。さらに、模試のような実力試験ではなく、家庭学習や学習到達度を細かくチェックする機会を増やす必要がある。	進路指導部 教務部 各学年	学力向上に向けた取り組み 生徒の学習状況調査結果
教育活動	◎教育の質の向上に向けたICT利活用教育の実施	ICT利活用教育の推進により、生徒の意欲や学力は向上したか	①教師が、生徒の視覚的・聴覚的な情報の活用を通して学習内容に興味・関心を持てるようにし、学習に対する意欲を高めるようにする。 ②教師が、授業においてICTを利活用することの効果をもとめ、授業内容の効果的な提示・展開・記録等を行う。 ③生徒が、学習に必要な情報を収集したり、繰り返し学習によって知識の定着を図ったりしやすいようにする。	①授業内容に関係する画像・映像・図表・グラフ・音声・楽曲等を提示し、内容に集中して取り組めるようにする。 ②効果的な提示方法やタイミングの検討、提示内容の吟味、展開・記録方法等の検討を行う。 ③情報収集のために必要な時間を設けたり繰り返し学習を行うための教材・資料等を作成したりするようにする。	B	①本校の電子黒板や学習用PCの活用に関する取組に対しては、93%の生徒が「学習に対する意欲や学力の向上に役に立っている」と回答していることから、生徒に対する効果は十分に発生していると考えられる。 ②本校の教師の81%が、ICT利活用教育の推進によって良い効果が現れていると回答している。生徒の回答の割合の方が高いことから、教師の実感以上に良い効果があるものと思われる。 ③については、各先生方によって取り組みが異なるので、分掌としての把握が不十分であった。	①については生徒の意欲や学力は、「ICT利活用教育の推進」を含め、様々な要素から向上していくものと考えられる。そのきっかけとして興味・関心を高めることの効果は重要であるため、今後も継続していきたい。 ②については効果的な提示・展開・記録等についての研修や、各教科内での検討会等を行い、より良い方法や新しい方法の開発を目指す。 ③については把握の機会を設けるようにする。	企画部	・生徒や教職員の授業評価や満足度調査結果・授業の充実に向けたICT利活用の状況
①生徒一人一人の学習状況等に応じた『伸ばす教育・伸びる教育の推進』									
教育活動	○希望進路の実現	生徒一人一人の希望進路は達成できたか	①難関大学複数名をはじめとする国立大学進学希望者のうち20名以上の現役合格を目指す。 ②幅広い学力層や多様化する進路希望に応じたきめ細かい指導を行う。	①成績上位者には特別指導を実施することで、難関大学合格へ向けた十分な対策を行う。また、生徒の受験機会を一般入試に限定せず、AO・推薦入試に向けた個別指導の対策にも力を入れる。 ②上位者・下位者の指導や小論文・面接指導は1対1を基本とし、その内容の充実を図る。	B	①3年生の成績上位者が、昨年度の九大合格者を囲んで受験勉強のアドバイスを受ける機会を作った。また、3年生は学習習慣を2回実施し、上位者向けの指導を行った。国立大学の合格者に関しては、昨年度0%増の合格者数を出すことができた。全体的には困難な結果であった。 ②定期考査前1週間は、各学年ともに下位者の指導を放課後に実施した。また、3年生の推薦・AO・2次指導においては、小論文・面接の指導希望者を全職員で割振り、個別指導を充実させた。	①大学で学ぶ意味、大学進学のリミットなどを機会あるごとに話し、大学進学希望者の割合を増やしたい。また、早期に国立大学のPRを積極的に行うことで、AO・推薦入試など幅広い入試方式での進路実現を目指す。成績上位者には、教科間で連携し、個別指導での対応を継続していく。 ②小論文指導においては、教員側の指導の質の向上を上げるために、外部講師を招いての研修会を実施したり、教員が外部の講習会に出向くことも必要である。	進路指導部	進路実績の向上
教育活動	○読書習慣の定着	生徒の読書への意欲や活動は活性化したか	①進路意識を高めるために、新しい図書館の配置とよりよい蔵書購入及び啓蒙を図る。 ②クラス単位の読書量を増やす。	①「特集コーナー」を設けて知的触発をする。 ②図書委員で管理する「学級文庫」については、寄贈図書を活用し、配布冊数を増やすなど充実を図り、クラスでの読書環境を整える。	C	図書館オリエンテーションのやり方を一新し、「特集コーナー」を設けて知的触発をすることができた。「学級文庫」についてはボックスが戻ってこなかったため実施することができなかった。	次年度は生徒図書委員が活発に活動できるようにしたい。たとえば「図書館だより」に生徒が書くコーナーを作るなど、生徒が創る図書館を考えたい。	教務部	生徒の読書量 コラム発行数

②生徒一人一人の関心・意欲に応じた『進路ガイダンスの充実』									
領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 (左記の理由)	具体的な改善策・向上策	担当分掌 (部)	ポイント
教育活動	○進路意識の向上	3年間を見通して計画的に進路情報を与えることはできたか、また、そのことによって生徒の進路に対する意識は向上したか	①将来学びたい学問分野と現代社会のトレンドや問題点を意識させる。 ②高大連携授業、職場体験活動などの学校外での活動にも積極的な参加に参加させる。また、オープンキャンパスや進路ガイダンスへも多数参加させる。	①『白高進路情報』に小論文指導に役立つ新書を学問分野別に一覧にし、総合学習や推薦・AO入試受験時に生徒に活用させる。また、社会問題や最新科学等を扱った映像ライブラリーを作り、生徒が教養を身に付けたりや社会背景を知ったりする手段の一助とする。 ②進路講演会(全)、大学説明会(全)、オープンキャンパス(全)、進路ガイダンス(全)、キャリア教育講演会(全)、合格体験発表会(1.2年)、実習生講話(1.2年)、志望理由書面接講座(2.3年)、大学訪問(1年)、仕事について学ぼう(1年)、ジョイントセミナー(2年)を進路指導部で主導し、生徒の進路意識を啓発するのに役立つ。	B	①『白高進路情報』を充実させるために、国公立大で出題された小論文のテーマ一覧と志望分野の知識を増やすために推薦新書一覧を掲載し、推薦AO受験の際の一助となるようにした。また、小論文指導や面接指導等に生かせるように、進路閲覧室に『映像ライブラリー』を設けた。社会、経済、国際、教育、科学、医療分野の現代社会の知識を涵養するだけでなく、各分野の持つ諸問題を意識できるようにした。 ②左記の講演会や講座をすべて実施し、現在学校で学んでいることの先を意識させたり、職業観を感化させたりした。	①『白高情報誌』や『映像ライブラリー』などのコンテンツが充実してきた一方で、生徒はもっと活用してもらいたい。そこで、LHRを利用して『白高進路情報』を学部・学科研究等で活用H19したり、『映像ライブラリー』の一部をDVDに焼き生徒が集まる図書室でもプレーヤーを用いて自由に視聴できるようにして改善を行いたい。 ②講演会に関しては質の高いものを精選して、生徒にいい刺激を与えることができるような人選をしたい。	進路指導部 各学年	主体的な取組
教育活動	○「総合的な学習の時間」を通じた進路意識の向上	1年:自分の進路について考え、それに添ってグループで研究することができたか 2年:自分の進路実現の方策について研究し、個人で研究することができたか 3年:入試に応じた研究をするとともに、志望理由についても明確にすることができたか	①1年:「夢を創るとともに、知る」 ・自己理解等を通して将来を見つめる。 ・グループで自分の問題を探る。 ②2年:「夢を実現するために、深める」 ・大学の学部・学科等の研究をする。 ・個人で自分の分野の問題を探る。 ③3年:「夢を実現するために、次へ進む」 ・自分の進路に応じた研究をする。 ・自分の進路志望理由を確認する。	①1年:「夢研究」においてワークシートを用い、自己理解に基づいて夢を確認する。また、グループ研究において自分の分野の問題について考えさせる。 ②2年:職業・学部学科についてまとめさせる。また、個人研究において自分の分野の問題について考えさせる。 ③3年:個人研究において自分の分野の問題についてまとめさせる。また、自分の進路に対する理由書を完成させる。	B	年度当初の計画に基づき、各学年の「総学」担当者の指示に従い、取り組むことができた。3学期には、「夢を形にプロジェクト」を開催し、1年生は7グループによる発表を行い、2年生は8名の代表者による発表をすることができた。その際、発表者以外の生徒は、評価を行うことで活動に取り組んだ。また、次年度のオリエンテーションでは、歴史を哲学で読み解く例を示すことができた。	次年度は、1年生が「総合的な探究の時間」と変わる。それに準じて、学校全体の活動を見直し、カリキュラムマネジメントの視点から「総合的な探究の時間」を考えたい。そして、学校全体の改善と生徒の進路に役立つようなものになりたい。さらに、2、3年の活動についても見直し、よりよい活動ができるようにしたい。	教務部	主体的進路選択に係る総学の取り組み
③ハイレベルな文武両道を目指す『質の高い授業』と『行事・部活動のバランス』									
領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 (左記の理由)	具体的な改善策・向上策	担当分掌 (部)	ポイント
学校運営	○教職員の資質向上	教職員の授業力向上のための研修は実施できたか	①互見授業、および職員間の授業参観を実施し、授業力の向上に努める。 ②授業評価を実施することで生徒の授業の理解度を把握し、授業内容の改善に努める。 ③指導力向上のための研修会への参加を支援する。	①互見授業後の授業研究会、および授業参観後の評価・感想を通して、授業の改善に必要な内容を知る。 ②2学期に授業評価を実施し、業績評価表にリンクさせるとともに、授業の改善に役立てる。 ③研修会や研究会等の情報提供を、積極的に行う。	C	①各教科担当者の代表による互見授業は予定通りに実施され、評価・感想の記入・伝達までは十分にみられたが、初任者や3年経過者等の研修を除き、授業研究会が行われた回数はほとんどない。 ②授業評価実施後の集計結果について、各授業担当者による確認までに留まり、または不十分で、その後の授業改善に向けての具体的な取組を企画部から提案できていない。 ③企画部だけでなく、各分掌からの情報提供も広く行われた。	①日程や時間帯などが確保できるようにし、可能な限り授業研究会を行い、授業者と参観者の意見交換を行うことで授業参観の効果を高める。 ②集計結果について、各授業担当者による分析と活用を依頼方法を提示できるよう検討する。 ③研修会や研究会についての情報収集を入念に行う。また効果的な提示方法について検討する。	企画部	職員研修 授業評価
教育活動	○主体的な生徒会活動	主体的な生徒会活動により、生徒会や委員会活動は活性化できたか	①各校務分掌と生徒会各部が連携を取り、各種委員会活動の活性化を図る。	①生徒総会を実施し、各部の目標を全校生徒で確認し、計画を実施する。	A	①生徒総会を実施し、前年度の活動報告と今年度の各部目標と活動内容の確認を生徒全員で行えた。	①担当教員と生徒会担当者が事前打ち合わせを密におこなえる環境づくりを行う。	生徒指導部 (生徒会)	生徒会活動
教育活動	○部活動の活性化	文武両道の推進を図ることができたか	①部活動加入率85%以上を目指す。 ②全国大会出場2部、県ベスト4以上3部、県ベスト8以上5部を目指す。 ③完全下校時間を厳守する。	①新入生に対して両キャンパスで共同の部活動紹介の実施や勧誘又は、見学などを行い、入りしやすい環境を作る。 ②限られた時間の中で効率の良い練習を行い長期的な強化を図る。 ③学習時間確保のためにも、下校指導を徹底し、学習ができる環境を作る。	B	①本年度の部活動加入率は、86%であった。 ②全国大会6部(運動部3部、文化部3部)、ベスト8以上2部と、県上位で活躍した部が増えたが、ベスト4以上が無し、ベスト8以上が2部は目標を達成できなかった。 ③完全下校時間の厳守は、実行できている。また、日々の学校生活の中で、部活動も精力的に活動できた。	①各学年とも協力して今後も維持できるようにさらなる工夫をしたい。 ②文武両道の実践のため、生徒会として学習環境を整えるとともにベスト8以上の部活動を増やせるように部活動でも強化してきた。 ③下校時間の厳守のため今後も下校指導を継続して行う。	生徒指導部 (生徒会)	部活動の取組と実績

④規範意識や礼節、報恩感謝などの素養を育むことによる『品格のある校風の醸成』									
領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 (左記の理由)	具体的な改善策・向上策	担当分掌 (部)	ポイント
教育活動	○規範意識やマナー	規範意識やマナーは向上したか	①高校生らしい爽やかな身だしなみで落ち着いたきのある学校生活を送らせる。 ②気持ちの良い挨拶が飛び交う学校を作る。 ③問題行動を「0」件にする。	①普通の学校生活の中から職員全員で指導にあたり、学期に2回は服装髪型検査を実施する。 ②毎朝生徒の登校時には職員が交代で登校指導を行い、生徒会役員が挨拶運動を実施する。 ③集会やホームルームの折に、生徒に対して注意喚起する。	C	①服装・髪型検査を1,2学期に1回ずつの実施に終わった。中には指導が必要な生徒がいることは事実である。 ②毎朝、全職員の協力で登校指導が実践できた。 ③残念ながら、問題行動が1件発生した。日頃からの指導の徹底を図る。	①服装・髪型に乱れがある生徒は、個人的に指導をおこなう。学期に2回の検査は日程的に厳しかったので、来年度は学期に1回実施を検討する。生徒会で標語などを作成して全校生徒に呼びかける。 ③問題行動に関しては日頃から注意喚起を促していく。	生徒指導部	挨拶運動 登校指導 集会における生徒からの呼びかけ
教育活動	○安全や防犯	安全、防犯意識の高揚を図ることができたか	①交通事故「0」件にする。 ②事故や事件に巻き込まれないように普通の指導から未然防止に努める。 ③自分の持ち物や貴重品など管理を徹底させる。	①安全・防犯・薬物に関する講話を専門機関に依頼して実施する。 ②集会やホームルームの折に、生徒に対して注意喚起する。 ③定期的に自転車の施錠点検を実施する。	B	①交通事故防止に関しては、注意を呼び掛けていたが、1件発生した。 ③自転車の施錠点検を定期的にも実施したが、100%には至らなかった。来年度は100%にする。	①交通事故はこちらが気をつけていても起きることがある。なので、常に注意して時間に余裕をもって動くように指導する。 ③朝の登校指導で生徒会と一緒に駐輪場付近に立ち、施錠の呼びかけもおこなう。	生徒指導部	自己管理能力 交通安全 自転車施錠 防犯
教育活動	○情報モラルや情報セキュリティ	生徒の情報モラルを高め、情報セキュリティへの意識を高めることはできたか	①個人情報について理解させ、個人情報の取り扱いに留意させる。 ②SNSの活用について指導を徹底する。 ③情報モラル・情報セキュリティの重要性について意識を高める機会を設ける。	①ホームルームや集会等での講話の中で、繰り返し注意喚起する。 ②定期的にネットパトロールを実施し、問題行動の未然防止に努める。 ③情報モラル・情報セキュリティに関する講習・研修などの案内を行う。	B	①②集会時には毎回個人情報の取り扱い方やSNSの使い方に関しては注意をおこなった。生徒会で標語を作って各教室に掲示して呼びかけた。 ③ポスター掲示や日常的な注意喚起を行うことはできた。	①②集会の折に毎回注意をしたが、ネットパトロールからの指導が12件あった。校内で撮影しているケースが多く、校内で携帯使用が28件であった。校内で使用しないような取り組みを検討する。 ③今後ますます重要になると思われるので、さらに充実させたい。	生徒指導部 企画部	講演会 職員研修 生徒研修 ネットパトロール
教育活動	●心の教育	思いやりのある豊かな心をはぐくむことができたか	①ホームルーム活動や講演会等を通して心の教育の実践を図る。 ②地域への理解をすすめる、郷土を愛する心を育てる。	①学期ごとのボランティア活動やテーマごとの講演会を開催し、思いやりや人間性豊かな生徒の育成を図る。 ②「佐賀のことを学ぶ時間」において、講話やホームルーム活動を計画し、白石や佐賀のことについて理解を深めるとともに、伝統行事への参加や郷土料理実習などの体験の機会を設ける。	B	①教育相談講演会を通じ、自己理解の重要性を理解させることができた。性に関する教育講演会では、それぞれが持っていた「生」と「性」「死」についての認識が揺さぶられ、改めて考える契機となった。	①クラスにおける人間関係に不安を抱える生徒も多く、状況を把握しながら、心の教育につながる講話等を計画していく。	保健指導部 各学年 教務部	具体的な目標の設定 (講演会、ホームルーム活動、ボランティア)
⑤家庭や地域社会との相互理解による『信頼される学校づくり』									
領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 (左記の理由)	具体的な改善策・向上策	担当分掌 (部)	ポイント
教育活動	●いじめ問題への対応	いじめの早期発見、早期対応に向け、いじめ防止基本方針を踏まえた取り組みはできたか	①生徒の実態を把握し、いじめの未然防止に努める。	①生徒会でいじめ防止に関する標語やポスターを作成し、全校生徒の呼びかける。	B	①生徒会で標語を作成し、各教室に掲示して全校生徒に呼びかけた。しかし、SNSでのいじめ事案が発生した。全校生徒にいじめに関する認識を持たせる必要がある。	①いじめの標語を作成したものの、全校生徒に浸透していなかったように思われる。生徒総会や全校集会で全校生徒の前で発表して周知徹底を図る。	保健指導部 生徒指導部 各学年	学校いじめ防止基本方針を踏まえた取り組み
学校運営	○保護者との連携	学校行事等への保護者の参加者数は増えたか	①年3回の評議員会、5月のPTA総会、体育祭時の駐車場係、文化祭時のPTAバザー等への積極的な参加を呼びかける。そのためにも、情宣活動をしっかりとっていく。	①まずは、生徒を通じて、各種行事の案内文を早めに渡すように準備する。同時に、スクールニュースに案内を配付した旨の文章を載せ、保護者へ確実に連絡内容が届くように努める。	B	①各行事の連絡・案内については、企画部と事前に協議し、発行した。また、保護者へのスクールニュースについては、各行事に関して必要な内容を発信できた。ただ、文書についてはなかなか保護者の元に届いていない現状がある。	①紙媒体の文書については、生徒を通じて配布している旨の内容をスクールニュースで配信することで対応したい。	教務部 各学年	PTA活動 保護者会 保護者面談
学校運営	○情報発信	学校情報の積極的な発信はできたか	①「白石高だより」を年5回以上発行し、学校情報を外部に積極的に発信する。 ②学校HPを通じて、学校行事の内容・予定、部活動の活動状況等を積極的に発信する。 ③学校説明会、体験入学については、新白石高校に向けての内容を吟味し、より分かり易く魅力的なものにする。	①「白石高だより」の発行については、保護者・中学生等へのより効果的な情報発信のための配布方法を検討する。 ②HPの内容の定期的な更新を心がけ、できるだけ新しい情報を提示する。各部活動には、少なくとも学期ごとの更新を依頼する。また、生徒・保護者への周知を図るため、職員もHPの最新情報を把握できるよう情報を提供する。 ③学校説明会、体験入学については、パワーポイント等を利用し、分かり易いものにする。	B	①「白高だより」は今年度7回発行し、学校情報の外部への発信に貢献した。ただし、配布方法はこれまでと同じ紙媒体と学校HP掲載のみであった。 ②企画部によるHP更新は順調に進めることができた。各部活動による更新は不十分であった。	②配布方法については、「白高だより」が生徒氏名・写真などの個人情報を多く含むため、現状以上に行うためには慎重に検討する必要がある。 ②各部活動による更新については依頼ばかりでは実施が難しいので、企画部による代行も検討してきた。	企画部 教務部	学校だより、HP、体験入学、学校説明会

⑥校舎制による円滑な学校運営									
領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 (左記の理由)	具体的な改善策・向上策	担当分掌 (部)	ポイント
教育活動	○授業の実践	授業の円滑な実施	①出張などによる自習時間を極力抑えて、教科内の操作や授業振替によって、実施率の向上を図る。 ②授業内容の工夫により、より中身の濃い、分かりやすい授業を心掛ける。	①出張情報などを掌握し、可能な限り時間割操作を行う。 ②課題の工夫や年間を見通した授業計画により、より充実した学習を提示する。	B	①先生方が出張の際にできるだけ時間割変更をしてくださり、自習時間は減らすことができた。 ②電子黒板や学習用PCなどをうまく利用することで、より充実した授業を展開することができた。	①次年度はさらに先生方の事前の時間割変更などの徹底を図り、対応していきたい。 ②週末課題などもできるだけ早めに配布するなど、生徒の学習計画がうまく立てられるように配慮していく。	教務部	
学校運営	○学校行事	学校行事の円滑な実施運営	①両キャンパスの生徒が取り組みやすいような行事を企画する。	①できるだけ早めに両キャンパスでの事前打ち合わせや検討を開始し、足並みを揃えるようにする。	B	①今年度、両キャンパス合同で行った新入生宿泊研修は、年度初めであり準備期間が短いため、打ち合わせがあわただしくなった。1学期にはクラスマッチが合同で行われ、こちらは生徒会の取り組みがスムーズであったと考える。	①来年度以降、修学旅行等の行事も合同実施での検討が必要である。したがって、さらに早めの検討開始や、双方の意見交換等が必要と考える。	企画部 教務部	
教育活動	○部活動の活性化	部活動の円滑な実施運営	①部活動加入率85%以上を目指す。 ②両キャンパスと部活動顧問の情報の共有化。 ③円滑なシャトルバス運行。	①新入生に対して両キャンパスで共同の部活動紹介の実施や勧誘又は、見学などを行い、入りやすい環境を作る。 ②部活動顧問会議を実施することで、両キャンパスの情報共有を図る。 ③シャトルバスの運行は、事務室と協力し部活動に参加しやすい環境を作る。	B	①両キャンパスで見学時間を合わせたり、部活動紹介を合同で行った。部活動加入率は86%と目標を達成できた。 ②部によってはチーム編成、顧問配置など新高校チームへの移行途中である。 ③事務室と学校行事の教務部と協力して円滑な運営ができた。	①引き続き、合同の部活動紹介や見学会など企画の充実を目指す。 ②年度初めの顧問配置より両キャンパスの情報共有しやすい環境を整備する。 ③引き続き、事務室と協力し部活動に参加しやすい環境を作る。	生徒指導部 (生徒会)	
学校運営	○学校業務	校務分掌等の円滑な実施運営	①両キャンパス間で校務分掌を平準化する。 ②分掌事務を連携し相互に情報交換することで、効率化を図る。 ③協同した学校行事などを企画し、精選を図る	①各校務分掌の構成を共通化し、相互に情報交換がスムーズに行えるようにする。 ②ICTツールを活用して、効率的かつ迅速な運営ができるよう工夫する。 ③学校業務をスリム化し、精選することで内容の充実を図る。	B	両キャンパス間での合同行事などは積極的に立案しながら実施をすることができたが、相互の行事調整などに課題が残った。また、それぞれの行事の目的を浸透させ、意義深いものとするのが課題として残った。	次年度は、さらに教育活動として成果の残るものを精選し、生徒の進路指導や生活指導につながる行事を実施しなければならない。特に、両キャンパスの生徒が協働しながら体験活動ができるものを定期的にも実施する必要がある。	教頭 主幹教諭	
教育活動	○効果的な生徒会活動	校舎間移動の円滑な実施運営	①学校行事と連携し、効率的なスクールバスを運用することで、部活動の効率をアップする。 ②相互のキャンパス間で専門性を生かし、部活動を活性化させる。 ③生徒による主体的な生徒会活動を運営する。	①校時や行事を鑑みて、より実態に合ったスクールバスの運用を心掛ける。相互に連絡を取り、運業者と緊密に連携をとる。 ②相互のキャンパス間で情報共有し、部活動生徒の参加の実態を把握する。また、実践報告などを行い、相互の魅力を発信する。	B	①SB運行により両キャンパスで式典・クラスマッチ等行事や部活動等の交流が、事務室と教務部と協力してスムーズに行われるようになった。 ②部活動によっては、互いのCP間でのトラブルや軋轢が生じることがあった。学期毎に部活動実態調査が必要である。	①他CP生徒の情報を共有することができるように「生徒調査簿」のコピーの交換を入学後すぐ行うことが必要である。 ②新年度の6月以降は、CPの緊密な連携により、部活動環境(活動場所)・顧問等の整備が急務ではないか。	主幹教諭	
本年度の重点目標に含まれない共通評価項目(あれば記入)									
領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 (左記の理由)	具体的な改善策・向上策	担当分掌 (部)	ポイント
教育活動	●健康・体づくり	望ましい生活習慣の確立と自己管理能力の向上を図る	①生徒の食や健康に関する意識を高め、自己管理能力の育成に努める。 ②保健室利用者数年間800人未満を目指す。 ③保護者と連携して健康管理・生活管理を推進する。	①定期的な「保健だより」「食育だより」の発行や講話を通して、食習慣や運動の重要性、健康管理に対する意識を高める。 ②毎週の保健指導部会において保健室の利用状況を確認し、状況に応じて、スクールカウンセラー・学年・保護者と連携を図る。 ③1学期の三者面談時に、定期健康診断等の結果を保護者に渡し、必要に応じて再受診を勧める。	B	①定期的な「保健だより」「教育相談だより」の発行・保健講話に加え、食や健康に関する情報掲示を行うことで、意識づけを行った。 ②毎週の保健指導部会や学期ごとの情報交換会で生徒の情報共有を行い、生徒支援につなげた。1月末までの保健室利用者は570人で、1クラス減の影響も多少あるだろうが、大幅に減少した。 ③1学期の三者面談時に定期健康診断結果一覧を配付し、再受診を促した。10月には、風邪・インフルエンザ予防についての保護者あて文書配布し、家庭との連携を図った。	①タイムリーな話題の「保健だより」「食育だより」の発行、生徒の状況に応じた講話等を計画し、自己管理の重要性を理解させ、生徒の自己理解を促す。 ②学年ごとに教育相談担当者を置き、校内連携を強化する。 ③定期健康診断後、速やかに受診勧告を行い、受診率の向上を目指す。	保健指導部	具体的な目標の設定(運動習慣の改善や定着化、望ましい生活習慣の形成、望ましい食習慣と食の自己管理能力の育成等)
学校運営	●業務改善・教職員の働き方改革の推進	職場全体の業務分析を行い、適切な業務の分散などによって、学校業務の改善を図る 教職員の各自の意識改革を促し、業務に係るストレスを軽減し、適切な勤務時間の運用を行う	①教職員の各自の働き方に関する意識の改革と、業務改善の方策を図る。 ②時間外自発勤務時間の「月100時間超」および「2～6か月平均80時間超」に該当する職員数を減らす。 ③ストレスチェックに係る「高ストレス者」を「0」にする。	①業務改革に係る職員研修を行い、働き方改革に係る意識の啓発を図る。 ②業務記録表の提出などを通して、職員の勤務状況を把握し、早期の声かけと産業医など専門機関の指導を合わせて、勤務時間の適切な運用を指導する。 ③職場全体を見渡した業務の分散を工夫し、業務に係るストレスの軽減を図る。	B	①定時退勤日の設定や年休取得促進の働き方が不徹底であったこともあり、職員の行動にまでつなげるには至らなかった。 ②毎月の業務記録表を確認し職員の長時間労働の状況については把握することができたが、産業医面談を望むもののや体に変調を来した者はいなかった。 ③業務の分散について心掛けたが、分掌の特性などでうまくいかない点が多々あった。	①定時退勤日等を明確にし、朝礼や職員会議等において、ことあるごとに呼び掛ける。 ②次年度より行われる改変に伴い、100時間超及び平均80時間超の対象者への産業医面談を確実にし、問題の未然防止に努める。 ③さらに業務の分散化・平準化に努めるとともに、業務の洗い出しによって無駄を省く。	保健指導部	具体的な目標の設定(運動習慣の改善や定着化、望ましい生活習慣の形成、望ましい食習慣と食の自己管理能力の育成等)

●は共通評価項目のうち必須項目、◎は共通評価項目のうち特定課題、○は独自評価項目